

ヨハネの福音書 第1章 1節

「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」

誕生時に乳児が会うのは母親の温もりと眼差しだろうか。母親の声は胎児のころから聞いているだろう。それらは温度や音の感覚として幼子に届いただろうと思う。最初の出会いは感覚的なものと言えるのではないかと思う。やがて、言葉の世界に生き始める。自分と他者との間で交わす言葉からコミュニケーションを身につける。聞こえる言葉から、物を理解し分別がついてくる。言葉の意味が深まり養われるところがある。

初めに、ことばがあったことは幸いだ。聞く者を想定してのことである。言葉を交わすことが前提としてある。関わりの必然が、初めに、ことばありき、である。聞く者に必要不可欠な語り手とのコミュニケーションであるから、初めに、ことばありき、である。

そのことばは、神とともにあった。ことばが必要不可欠なことである。それは、神とともにあることが必要不可欠だ。そうでなければ、言葉遊びに陥る。さらに、ことばは神であった。聞く者が聞くためには、神がおられなければ聞けないということだ。ことばを放つ神、ことばとともにある神、そのことばが初めにあった、とお語りになる。ここに、交わりが生まれ、自分の本当が、意味が与えられる。

2022年7月2日